
Phantom

erika

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Phantom

【Nコード】

N5198B

【作者名】

erika

【あらすじ】

毎朝、気になる女の子・・・彼女の存在が、僕の中で、どんどん大きくなってゆく・・・そして、いつしか、それは、僕の中で一生消えることのない存在となった・・・

第1話

朝、駅のホームや改札は、大勢の人でごった返している。通勤や通学で、様々な人が行き来する。

人ごみの嫌いな僕は、そんな雑踏に、毎朝うんざりする。

僕は、そんな人達に紛れて駅の改札を通り抜けると、いつも、駅の外の喫煙コーナーで、タバコを1本吸う。

僕は、その駅からバスに20分程乗った所にあるの電子機器やコンピュータを扱う会社に勤めているのだが、バスの発車時間までにそこでタバコを吸う事が、朝の日課のひとつになっていた。

僕がそんな風にバスを待つ数分の間には、いろんな人が僕の目の前を通り過ぎて、駅に入ってゆく。

スーツを着てびしっと決めている人。セーターにジャケット、ジーンズというカジュアルな格好の人。いや、そういう服装の違いだけではなく、少し眠そうな顔をしている人や会社で会議か何かがあるのか、少し張り詰めた顔の人など、本当にいろんな人が僕の目の前を通り過ぎてゆく。

それから・・・

それから、1人の女性と。

彼女は、いつも、僕の目の前を走ってゆく。

僕が、その喫煙コーナーでタバコに火を点けた瞬間に、僕の目の前を走ってゆくのだ。

電車の到着時間、ギリギリなのだろうか。いつも、駅のホームを気にしながら走っている。とても早く走り抜ける日もあれば、少しゆっくりと走り抜ける日もあって、僕は、そんな彼女を見ると、「そんなに走るくらいなら、もう少し早く、家を出ればいいのに・・・」と思わずにはいられないのだった。

けれども、それは決して苛立つものではなかった。なぜか、逆に、

とてもおかしい事に、妙に微笑ましくなってしまうのだった。

そして、僕は、いつの間にか、そんな彼女の姿を探すようになってしまっていた。

電車が到着すると同時くらいに、僕の前を走り抜ける時などは、彼女が改札を通り抜け、そして階段を駆け上がり、電車に飛び乗る様子を想像せずにはいられなかった。もしかしたら、間に合わなかったかもしれない。そんな風に想像する事もあった。

そして、そういう時、僕は思うのだった。もしも、もしも突然、彼女の目の前に、そう、彼女が走って来るその前に、僕が飛び出したのなら・・・と。

彼女とぶつかり、そして、彼女が電車に乗り遅れる姿を、いけないと思いながらも想像せずにはいられなかった。

そして、たまに、僕は、本当にそうしたいという衝動にかられるのだった。

そんな日々が数ヶ月続いたある日のことだった。

その日も、僕は、いつもの喫煙コーナーで、いつものようにタバコに火を点け、彼女がやってくる方を見つめながら、タバコを吸っていた。

やがて、しばらくすると、彼女の姿が見えた。

けれども、その日、彼女は走っては来なかった。

時間もいつもどおり、いや、ほんの1分ほどだけけれども遅いくらいだった。

けれども、彼女は、ゆっくりとのんびりと歩いて来た。

僕は自分の事のように時間を気にし、そして腕時計を見た。やはり、ほんの数分だけでもいつもより遅い。

僕はちらりとホームの方を振り返った。

彼女が乗るであろう電車が到着して、人が一斉に降りてきた。け

れども、彼女は、そんなホームの様子すら目に入らないという感じ
で、ホームを気にもしなければ、走ろうともしなかった。

あまりにも、いつもと違うその光景に僕は戸惑い、そして、その
日のその様子は、僕の心に強く根づいてしまったのだった。

第2話

それから1週間後。

僕は、いつもの喫煙コーナーで、いつものようにタバコを吸っていた。

「今日こそは、彼女は来るだろうか？」と気にしながら・・・

あの日以来、僕は彼女を見かけていなかった。有給を取って旅行にでも行っているのだろうか？ それとも風邪でもひいて仕事を休んでいるのだろうか？ 僕は、あらゆる状況を想像して、「今日こそは彼女に会えるだろうか？」と、毎日、思っていた。もしかしたら時間を早めたのかもしれない・・・と思い、電車を1本早くもしてみた。けれども、彼女の姿を見かけることはなかった。

「もう、このまま、会う事もないのかもしれない・・・」
いつからか、僕はそう思いかけていた。

僕はタバコを灰皿に押し付けて、火を消そうとした。

すると、ちょうどその時、見慣れたコートを着けた彼女が駅の方へと走ってきた。

「あっ・・・」

僕は心の中で小さく呟くと、心の動揺を隠すかのように、慌ててタバコを灰皿に押し付けた。

けれども、タバコの火を消し終わると、そのタバコの火はまるで僕の心に燃え移ったかのように、僕の心を熱くした。

僕はだんだんと冷静さを失い、そして気が付いた時、彼女の前に飛び出していた。

僕と彼女は、僕の思惑どおり、軽くぶつかった。

「きゃっ」

咄嗟に彼女が叫び、そして、倒れるように座り込んだ。

「うわっ」

僕も、自分から飛び出しておいたくせに、驚いたように叫んでみ

た。

「う、ごめんなさいっ！」

彼女はそう言うと、慌てて周りを見回した。

彼女の鞆からは、本や携帯、ポーチ、財布などが飛び出していた。

「こつちこそ、ごめん」

僕はしらじらしくそう言うと、彼女の前にしゃがみ込み、それらを拾い集めて彼女に渡した。

「こつちこそ、ごめんなさい。私が前も見ずに走ってたから」

彼女はそう言うと、僕が渡した物を鞆に放り込み、すくつと立ち上がると、ぺこりと一礼して、駅の中へと消えて行った。

「はあ」

彼女が駅に消えてゆく姿を確認すると、僕は、ひとつ、小さくため息をついた。

それから、何気なく周りを見回した。

と、その時、僕の目に、小さなペンギンのキーホルダーのついた鍵が目に入った。

僕はそれを拾うと、目の高さまで持ち上げてまじまじと見た。

自転車の鍵？ バイクの鍵？ どこかのロッカーの鍵？

僕は、その鍵の形状とは、全く合わないだろうとありとあらゆる鍵を想像した。

けれども、どこからどう見ても、それは家の鍵にしか見えなかった。

「彼女の家の鍵なのかなあ？ だとしたら困るよなあ？」

僕は、一瞬、彼女を追いかけようかと思った。けれども、追いかけたところで、もうホームに彼女の姿はないだろうと思ったし、第一、僕は、彼女の乗るはつきりとした電車を知らなかった。

僕は、仕方なく、その鍵をコートのポケットに入れると、「明日にでも渡そう」と決意し、バス停へと歩き出した。

翌日、僕は朝からずっと考えていた。どうやって彼女に鍵を返そうかと。普通に話しかけようか？ それとも、また、偶然じゃない偶然を作り出そうかと？

結局、僕は、ただ単に「すみません・・・」という形でしか話しかける事が出来なかった。

「昨日、僕とぶつかった時、これを落としませんでしたか？」

僕はそう言うと、ペンギンのキーホルダーのついた鍵を、彼女の前に差し出した。

一瞬、彼女の顔が曇った気がした。

「あ、ありがとう」

言葉に詰まりながら、彼女はそう言って、僕の手の平の上の鍵を取ろうとした。けれども、彼女はそれを上手く取る事が出来なくて落としてしまった。

「あつ」

僕達はほぼ同時に小さく呟き、僕はその鍵を取ろうとしゃがみ込んだ。それから、そのまま、下から覗きこむような感じで、彼女に鍵を渡そうとした。

けれども、僕は、そうした事を少し後悔した。

下から彼女を覗き込んだ僕の中には、彼女の涙が映ったのだ。

僕は言葉につまり、そして、彼女は「しまった！」というような顔をした。

そして、彼女は鍵も持たずに、そのまま走って行ってしまった。

後に残された僕の脳裏からは、彼女の涙が離れなかった。

結局、僕は、彼女に鍵を返せないまま、それからまた数日を過ごしていた。僕に涙を見られた事が気まずくて、彼女は僕を避けているのか、それとも、ただ単に会わないだけなのか？

いきなり泣くなんで、きつと何かあったんだと気にはなっただけけれど、僕にはどうする事も出来ず、いつかまた、彼女と会う日が来る

事だけを、ただひたすら待っていた。

第3話

そして、そんなある日、僕が駅でタバコを吸っていると、後ろから「すみません」と、誰かに声をかけられた。

僕が驚いて振り返ると、そこには彼女が立っていた。

「あっ」

あまりにも突然な事だったので、僕は「あっ」という言葉以外に何も言えず、とても間抜けなりアクションをしてしまった。

彼女は自分から話し掛けたものの、何か言葉を探しているようだった。

「何か？」

僕がそう言うと、彼女は思い切ったように、鍵の事を聞いてきた。

「あのお・・・鍵・・・」

「あ、そうだね」

僕もそれを思い出し、そして、コートの右のポケットに手を突っ込んだ。

あの日から、僕は、いつ彼女に会っても鍵を返せるようにコートは毎日同じものを着ていたし、鍵を取り出す事もしなかった。

けれども、そこには鍵がなかった。

「あ、あれ？」

僕は慌てて、左のポケットの方も探ってみた。

けれども、そこにも鍵はなかった。

僕は焦った。

やばいっ！ 人のものを無くしてしまった。

しかも、鍵なんて大切なものを・・・

そんな焦りが、僕の心いっぱいに広がっていった。

彼女もそんな僕を見て、なんとも言えないような顔をしている。

僕は少しおどおどしながら、申し訳ないという気持ちいっぱい、

彼女に言った。

「すみません。無くしてしまっただかもしれません」

彼女は、一瞬、「最悪！」というような顔をした。けれども、すぐに笑顔をつくり、僕に言った。

「別にいいです。気にしないで下さい。どうせ、もう使わない鍵だったから」

けれども、僕には、その笑顔はとても無理をしているように感じられた。

「それじゃ」

彼女はそう言うと、僕の前から去っていきこうとした。

「あ、待って」

僕は、咄嗟に、彼女に声をかけていた。

「あのお、少しだけ、話、出来ませんか？」

そして、僕は、少し戸惑いながら、そんな風な言葉を口にした。

僕は、ずっと、心のどこかで、彼女と話をしたと思っていて。

幸い、今日は彼女が僕を待っていてくれたので、時間に余裕がある。でも、もしこの機会を逃すと、僕はまた、ただ毎日見ているだけの人になってしまう・・・

その時の僕は、彼女とこうして話が出来た事を、ただ、それで終わりにしてしまいたくないと思ったのだった。

彼女に勇気を出して話ませんか？と告げてから、僕達は、徐々に、プライベートでも会うようになっていった。

一緒に映画を見に行ったり、ショッピングをしたり、時にはドライブへ行ったりと、僕には本当に楽しい日々だった。

やがて、僕は、彼女に完全に恋している自分に気づき、そして、冬の寒い海で、車の中で、彼女に自分の気持ちを伝えた。

「特別な人として、ちゃんと付き合いたい・・・」
彼女はゆっくりと頷き、そして、僕達の交際がスタートした。

「おいおい、またかよ」

いつもの朝。いつもの駅。いつもの時間。

僕は、独り言のように小声でそう言うと、2本目のタバコに火を点けた。

付き合おうと決めてから、僕達は、毎朝、少しでもいいから会う時間を持つという事にした。

お互いが乗る電車やバスの時間よりも10分早く待ち合わせ、顔を合わせ、軽く話してから会社へ向かう。周りから見れば、きつと、呆れるような事かもしれない。けれども、僕にとっては、それは「今日も1日、頑張ろう!」という元気の素だった。

けれども、彼女はいつも寝坊するのか、1、2分あるかないかのギリギリに走ってきて、「じゃーね」とだけ言って、僕の前を走り抜けてゆくのがあった。

付き合おうと決めた頃の「毎朝、話そうね」という約束など、ほんの数回あるかないかだった。

「まったく・・・」

僕は呆れながらも、彼女が走って来る姿を、密かに楽しみにしていたりもした。

けれども、その日、彼女は走って来なかった。

僕は2本目のタバコも吸い終わると、バス停へと向かい始めた。彼女には会わなかったけれども、僕は、それを、そんなに気にしなかった。今までにも何度かあった事だったし、たまたま早く会社に行っただのかもしれないと、軽く思っていた。

「キーーーーッ!!!!!!」

僕がバス停へ並んだ時、僕の後ろ側で、耳を引き裂くような強烈な車のブレーキの音がした。

そして、それからあまり時間も経たないうちに、僕の目の前で車が渋滞し始めた。僕は振り返って、ブレーキの音を見た。車が密集し、そして、事故があったらしき場所には、周りにいる人達の視線が向けられていた。

僕が乗るはずのバスが、それよりもずっと向こうで、立ち往生している様子が見えた。

僕は、もともと、あまりそういう事に、おもしろおかしく興味をもてない性格だったので、周りがざわついていても、なるべく何事もなかったかのように、普通にするように努めた。

けれども、きっと、その事故が自分に関係のある人だったならば、そんな風にはしていらなかっただろう。

その時の僕は、まさか、その事故が自分と大きな関係があるなど思いもしていなかったのだ。

その事故の日から、僕は、朝、駅で彼女に会う事がなくなった。いや、それどころか、彼女と連絡すらつかなくなってしまったのだった。

彼女の携帯に電話をしても、彼女が出る事はなく、「留守番電話サービスに接続します」という事務的な声が聞こえるだけだった。

僕は、基本的に、あまりメッセージを残す事がなかった。けれども、あまりにも彼女が電話に出ないため、僕は、だんだんと、彼女が居留守を使っているのではないだろうか？と疑い始めるようになった。そして、3日目の夜、僕は思い切ってメッセージを残してみた。「どうして電話に出てくれないの？ 僕を嫌いになったのなら、きちんとそう言って欲しい。黙って居留守なんて使わないで欲しい。一度、きちんと話がしたいんだ」

けれども、彼女からの電話はなかった。

第4話

4日目の夜も、僕は、彼女の携帯に電話をかけた。
ブルルルル・・・

いつものように呼び出し音が鳴る。留守番電話に繋がる前の呼び出し音。

「ああ、また留守番電話か・・・」
僕は、小さくぼやいた。

と、その時、僕の耳にかすかな音の変化があった。
何回か鳴り続けていた呼び出し音が途切れたのだった。

そして、いつもと違う状況に戸惑う僕の耳に、「もしもし」と低く沈んだ男の声が届いた。

「おとこ？ どうして？ どうして男が出るんだよ」
咄嗟に、僕は電話を切ってしまった。

僕はショックを受けていた。 どうして、彼女の電話に男が出るのか？ 何故、彼女が電話に出ないのか？ そんな思いが、ずっと頭の中でぐるぐると渦巻いていた。

頭の中に、先ほどの男の声が、何度も何度も語りかけてくるようだった。もしもし・・・と。

僕は、しばらく、何も考える事が出来なかった。
息をする事さえも忘れたかのような、そんな感じだった。

そして、そんな僕の遠くなった意識を引き戻すかのように携帯が鳴った。携帯の液晶画面には、彼女の名前が表示されていた。

出るべきか、出ないべきか・・・
僕は少し迷った後、勇気を出して通話ボタンを押し、電話を耳に

あてた。それから、ゆっくりと、「もしもし」と言った。
「もしもし」

電話の主は、彼女ではなく、先ほどの男からのようだった。それは、先ほどよりもずっと低い声に感じられた。僕の気持ちに追い討

ちをかけるかのような、そんな感じの声だった。

「どうして……」

僕は心の中でだけそう呟き、相手が話すまで、ずっと黙り込んでいた。

そして、男も黙り込んでいた。

どのくらいの間がたったのだろうか？

その男は、ゆっくりと話し始めた。

「姉貴の…… 姉貴の知り合いですか？」

姉貴？ お姉さん？

ん？ 何だ？ こいつは、彼女の弟なのか？

この時、僕は、自分で、自分の体の力が抜けていく感じがはつきりとわかった。

この電話を取った時から、いや、最初の電話で男が出た時からずっと、僕は、まるで、戦場にも出たような気がしていた。だから、声の主が、彼女の弟だと知って、僕は本当に安心したのだった。

僕の心が少しずつ穏やかになりかけたその時、電話の向こうの彼女の弟が言った。

「姉貴が事故にあって、意識不明なんです。もう、4日も目を覚まさないんです」

ピッ、ピッ、ピッ、ピッ……

静かな病室で、心電図の音だけが鳴り響く中、僕はかたく目を瞑っていた。そして、両手を顔の前で合わせ、祈っていた。

「お願いだよ。お願いだから、目を覚ましてくれよ。もう一度、俺に笑いかけてくれよ」

僕の合わせた右手と左手の間には、白いシートから伸びた彼女の右手が挟まれていた。

僕は、その手に、ぎゅっと力をこめた。

けれども、彼女の右手の反応は全くなかった。

彼女の眠るベッドの横の机の上には、薄いグリーンの紙袋が置かれていた。紙袋の口は開けられていて、そして、その袋の口を閉じていたと思われる同系色のグリーンのリボンが、無造作に置かれていた。

「たぶん、あなたにだと思っんです」

電話を受けた翌日、僕は仕事を午前中で終わると、急いで病院へと向かい、そして、彼女の弟は、僕に会うなり、そう言って、そのグリーンの紙袋を僕に渡してきた。

開けてみると、そこには、見るからに手編み風という感じの淡いグレー色のマフラーと、そして、『Valentine's Day』いつまでも一緒にいようね』と書かれた1枚のカードが入っていた。

それから、僕は、彼女の弟から、彼女が毎晩徹夜で頑張ってマフラーを編んでいたという事を聞いた。そして、僕は、この数週間、何故、彼女が、毎朝、ギリギリに走ってきていたのかを知ったのだった。

「馬鹿だよ。本当に馬鹿だよ。こんなものの為に、事故に遭うなんて」

僕は悔やまれてならなかった。

あの日、事故に遭った人は、僕の大切な人だったのに、今、僕の目の前で、かたく目を閉じて眠っている彼女だったのに、なのに、僕は、それに全く気がつかなかった事がとても悔しかった。

僕が彼女の眠るベッドの隣に座り、彼女の手を握ってから、1時間、いや、1時間半が経とうとしていた。

病室の西の窓からは、夕日が射し込み始めていた。

「あ……ついで……」

僕の耳に、小さな蚊の鳴くような声が届いた。

僕は慌てて顔を上げると、彼女を見た。

彼女は目を開けて、僕を見ていた。そして、どうしたの？と言いたげな瞳で、またもう一度繰り返した。

「あついよお。武志の手・・・」

僕は涙が溢れそうになるのを堪えて言った。

「温かい！だるう？」

「温かいじゃなくて、熱いだよお。だって熱すぎて、目が覚めちゃったんだもん」

彼女は、自分が4日間も眠り続けていた事など全く知らず、脳天気にそう言った。

「いいんだよ。生きてるって事なんだから」

僕はそう言うと、机の上の紙袋を取って、彼女に見せるようにして言った。

「ありがとう」

彼女は、「初めてで、ほんと大変だったのよ」と言い、ゆっくりと微笑んだ。

僕は、そんな彼女に優しく微笑み返すと、ナースコールで先生を呼び、病院の待合室で待機していた彼女の弟にも、意識が戻った事を伝えた。

しばらくすると、彼女の両親もやってきて、涙を流して、彼女の無事を喜んでいた。

僕はその光景を見て、少しうらやましさを感じながら、病院を後にした。

外はとても寒く、僕は彼女にもらったマフラーを取り出して首に巻いてみた。普段、マフラーをしない僕には、それは、少しちくちくとして嫌な感じがした。けれども、なぜか、僕はマフラーをはずそうという気にはならなかった。

第4話（後書き）

次回でいよいよ最終話です。

本当は14日までに完結したかったんですが、バレンタイン終わっちゃいました。

でも、最後までお付き合いいただけると嬉しいです。

第5話

夜明け前、僕は携帯電話のコール音で目を覚ました。辺りはまだまだ暗く、夜明けまで、だいぶん時間があるようだった。

何気なく取り、少し寝ぼけた声で、僕は「もしもし」と言った。けれども、電話の向こうからの返事はない。

電話の主は黙り込んでいた。

その時間はとても長く、そして、その静かな沈黙の時間によって、僕の目は、徐々に覚まされていった。

「もしもし」

僕は、もう一度、語りかけてみた。

すると、電話の主は、ずっと一回、鼻をすすると、ボソボソと言った。

「さつき・・・姉が・・・姉が・・・亡くなりました・・・」

それらの言葉は、ポツポツと、途切れ途切れに僕の耳に届いた。

そして、ずいぶんと長い時間が経ってから、僕の口から、短い言葉がこぼれていた。

「どうして・・・」

朝。いつもの時間。いつもの場所。いつもの景色。

見た目には今までと何も変わることはないはずの朝。

けれども、その朝は、明らかに、いつもと違う朝だった。

明け方に眠っていた状態で電話を受けたためか、彼女の死は、僕の中では、まだ現実になりきっていなかった。

そのため、僕の目には、その日の朝の風景はいつもとなんら変り
がなかった。

失恋したりして恋人を失った人は、よく、その後、目に映る景色
は、何もかもが色あせて見えると言う。けれども、僕には、駅の景
色はいつもと全く同じだったし、駅前植えてある木も、いつもと
同じ、いや、いつもよりも一段とあおく茂っているように見えた。
道行く人達の顔の色も、きちんと肌色に見えたとし、空はどこまでも
青く、雲は濁りがなくくらいに白く、とてもきれいだった。

「容態が急変して、本当に突然でした」

彼女の弟は、何度も何度も鼻をすすりながら、そう言った。

僕は、そんな彼女の弟の言葉をただ黙って、どこか遠くで見知ら
ぬ人が話している自分とは全く関係ない出来事のように聞き、そし
て電話を切った後、ゆっくりとベッドから起き上がると、タバコを
1本吸った。

まだ真つ暗い部屋の中で、タバコの先端についた火が、小さく赤
く、じりじりと燃えてゆく。僕は、タバコを吸わずに、それをじつ
と見つめていた。そして、ゆっくりと灰皿に置くと、そのままそれ
を見つめていた。

火は大きな炎こそ出さないが、ゆっくりと赤く燃え上がり、かと
思えば、また静かに燃え、また赤くなりを繰り返す、やがて、いつ
の間にか消えてなくなった。

それは、僕には、まるで彼女の命と同じように感じられた。

短く、はかない時間……

暗い部屋で、電気も点けないで、そうしていると、僕は、なぜか、
とても幻想的な世界にいるように思えた。

僕は、その明け方の出来事をゆっくりと思い出しながら、いつもの朝と同じように、コートのポケットからタバコを取り出すと、火を点けて一口吸った。

タバコの煙が、僕の中にゆっくりと入ってゆく。

そして、僕を、遠く・・・そう遠く、彼女と出会ったあの日へと連れてゆく。

大丈夫。あれは夢だったんだ。彼女は元気だよ。きっと、僕は今日も彼女に会えるんだ。

向こうから、あの花屋の店の蔭から、今日も、彼女は、きっと走って来るはずだから・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5198b/>

Phantom

2010年10月8日15時44分発行